

日本品質管理学会の50年とこれから

一般社団法人 日本品質管理学会

副会長 永田 靖*

1. 創生

日本品質管理学会は本年で50年目を迎えました。本学会を設立された方々、本学会の発展のために尽力されてこられた方々に心からの敬意と感謝を表します。

1945年に日本規格協会が、1946年に日本科学技術連盟が設立されました。1949年に「品質管理と標準化セミナー(QS)」が日本規格協会により、同じ年に「品質管理ベーシックコース(BC)」が日本科学技術連盟により開設されました。これらは、技術者に品質管理の考え方とそれを支える統計的方法を長時間にわたって教育するという画期的なプログラムであり、現在も継続されています。BCテキストの冒頭に「話題を追い、即効性のある技法を教えるのではない。『品質』の視点から、重要問題を鮮やかに解決できる本格的な技術者を養成する」と述べられています。そして、いま、データ解析の重要性が広く認識されるようになりました。やっと時代が追い付いてきた感があります。

1951年にデミング賞委員会が発足しました。デミング博士(1900-1993)が講義録の印税を寄付され、デミング賞の基金になりました。デミング賞は発展的に継続され、世界的なステータスを保っています。デミング博士の言葉は、現代のデータサイエンスの教科書でも引用されています。例えば、「統計的学習の基礎」(Hastie 他著、共立出版)の冒頭には、デミング博士による次の言葉が引用されています。

「神の御業なら信じよう。さもなくばデータを。」

戦後まもない混乱の時期に、先見の明を持った人た

ちがいて、上記のような活動を開始できたことは奇跡的であり、わが国にとってとても幸運だったといえます。そして、その約20年後、満を持して日本品質管理学会がスタートしました。

2. 隆盛

日本の品質管理業界は数々の至宝ともいえる方法論や考え方を生み出してきました。「方針管理」「機能別管理」「日常管理」「QCサークル活動」「QCストーリー」「課題達成型QCストーリー」「特性要因図」「QC七つ道具」「新QC七つ道具」「狩野モデルによる品質論」「品質機能展開」「工程能力指数」などが実践的な過程で編み出され、本学会を中心として学問的な研究が行われてきました。

私が本学会に入会したのは1984年でした。まだ発足して14年という若い学会でした。当時は、日本製品の品質が世界で絶賛され、多くの方々が品質管理活動を一生懸命勉強するという時代でした。品質管理活動が良い品質のものを作るために必須だと、とても前向きに考えられていました。品質管理はブームとなっていました。現在のデータサイエンスブームの熱気と同様のものを私は感じていました。

3. 維持

一世を風靡したかに見えた品質管理活動でしたが、ブームは必ず下火になるものです。それは、狩野モデルにおいて「魅力的品質」はいずれ「当たり前品質になる」という説明にも整合します。品質管理活動が「当たり前(品質)」になることは、私はむしろ望ましいと考えています。ただ、危惧するのは、それが「無

*早稲田大学 教授

関心（品質）」になっていないかということです。放っておいてもその当たり前が維持できればよいのですが、たいていの場合、維持するには努力と熱意が必要です。努力と熱意がおろそかになると、品質不祥事につながるのだと思います。

品質管理活動のリーダー的な企業の方々から、「品質とは」「品質管理とは」「方針管理とは」「日常管理とは」などを知らない人たちがたくさんいる、と最近しばしば耳にします。「当たり前」を維持するために、そして品質文化を根付かせるために、しっかりとした教育をやり直す必要性を感じています。本学会がその中核的な役割を担うことを期待しています。

4. 成功

2005年から始まった「品質管理検定（QC検定）」は成功しました。レベル表を本学会がオーソライズし、日本規格協会と日本科学技術連盟が共同で運営しています。受験申込者数は、右肩上がりです。コロナ禍前の2019年には年間約14万人でした。開始当初の予想をはるかに超える伸びです。

QC検定制度は待ち望まれていたのだと思います。企業は品質管理の教育システムの評価方法を持っていない場合が多いからです。また、企業が個人の品質管理に関する力量を測るのが難しいからです。QC検定を利用すると、教育システムが正しい方向に向いているのか、力量をもった人たちがどれくらい存在するのかを他社と同じ尺度で測ることができます。

「社員全員が3級取得を目指す」「技術系部門は全員2級以上の取得を目指す」といったかけ声で、受験を推奨・支援している企業があります。社員のベクトルの方向性をあわせ、品質管理活動を「当たり前」なものとして維持していく努力と熱意を感じます。こういった状況を見ると、頼もしい気持ちになります。

安定した「当たり前」をベースにして「顧客価値創造」に向けて取り組んでいただきたいと思います。

5. 試練

10年前、東日本大震災が起きました。安心・安全が決して「当たり前」ではないことを思い知らされました。そして、その10年後、今度はコロナウイルスによって甚大な影響を受けています。10年前とは形が異なるものの、「平穏な生活」が「当たり前」ではないことを再び思い知りました。

今回のコロナ禍は、品質管理の規範を浮き彫りにしたように思います。トップのリーダーシップと方針管理の適切さ・大切さをつくづく感じました。全員参加と日常管理の重要性を噛みしめました。世界中で仮説が立てられ、要因分析と対策立案・再現性の検証がなされています。数々の問題解決の現状を期待しながら見守っています。データリテラシーの大切さも痛感しています。

コロナ禍によって、見えないことがたくさん顕在化してきたと同時に、やればできる新しい活動様式も明らかになってきました。新たな学会活動のヒントにもなりそうです。リモートによる各種行事の実施により、出張せずに参加できるようになりました。ただ、講演者の話を直接聞くという臨場感は欠けますし、私たちの大好きな「一献傾けながら議論する」ができないのは残念です。新しい形の学会行事の運営をこれから考えていかなければなりません。

6. 朗報

画期的なできごとの一つとして、昨年、本学会の第45年、46年度の会長だった椿広計氏が品質工学会の会長に就任されたことを挙げます。棟近雅彦前会長のときに、本学会は品質工学会と共同研究会を開催するようになり、それが発展した形です。企業が品質管理活動を行うに当たり、本学会と品質工学会の交流がほとんどないことは、企業の品質管理担当者を悩ませていました。それがほぼ解消されると思います。田口玄一博士が開発・提唱されたいわゆる「タグチメソッド」の数々の方法論は世界に誇るわが国の至宝です。今後の両学会の深い交流が期待されます。

7. 事業

最後に、50周年記念事業の取り組みを紹介します。

1. 記念誌『あゆみ』の出版。この10年間の学会活動を記録したものです。
2. 記念シンポジウム・祝賀会。
3. 英文論文誌 Total Quality Science の充実。
4. 品質管理活動周知キャラバン活動。リーフレットを作成し、新たな層に品質管理を普及させます。
5. 学会ウェブサイトの大幅な改善。

50周年を迎えた今、新たな気持ちで、今後もわが国の発展のために品質管理の立場から皆様とともに本学会がアクティブに活動していくことを願っています。